

平成21年度農林水産試験研究中間評価(平成21年7月6日開催)結果

番号	機関名	課題名	研究期間	研究内容	総合評価	評価委員コメント	委員コメントに対する研究機関の回答・考え方
1	水産総合センター	安全なカキの生産体制の確保に関する研究	H19～22	安全なカキの生産体制を確保するため、養殖マガキと天然イワガキのノロウイルス出現傾向を明らかにする外、これまでの浄化処理方法を改善する。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>重要。リスク計算を信頼できるデータに基づいて行うこと。</li> <li>安全なカキの生産体制を確保することは、カキ販売者のみならずノロウイルスの二次感染を考えた際、食品産業に携わる者にとっても待たれるところである。更なる開発によって食味劣化の問題をクリアされることを期待する。</li> <li>河川汚濁など、総合的な計画が必要。データには頻度(確率)を考慮してリスク計算を行うべき。</li> <li>調査結果に基づいたノロウイルス除去(汚染防止)対策の確立が望まれる。</li> <li>UV海水殺菌水による浄化処理は、常温・48時間で効果があるとの報告であったが、その処理を行えば、市販で「安全宣言」を出せるまでの精度があるのが不明確だ。</li> <li>下水排水、集落廃水の浄化ともリンクさせ、環境問題としての問題提起も必要か。</li> <li>今後の消費拡大のためにも研究を続けてほしい。</li> <li>カキにおける食中毒の発生を飲食店だけでなく漁業者にも求めることは法律上無理があるかもしれないが、その点も何らかの対応をしていかないと能登イワガキNO1のブランドは作れない。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>同一海域で2年に亘るノロウイルスの出現調査を行う計画であり、その結果に基づいてリスクを検討する。</li> <li>現時点での浄化処理方法では、ノロウイルスの蓄積レベルを下げることはできても、完全な浄化ではないため、更に精度を高めるための浄化試験を進める。</li> <li>リスクゼロのカキの出荷は困難であるが、調査結果を活かした出荷方法を検討し、リスクの少ない安全なカキとしてブランド化を目指したい。</li> <li>安全なカキ生産体制の確保は、生産現場だけでは解決できない問題であるため、関係機関にも蓄積したデータを示して関係機関に協力を求めたい。</li> </ul>
2	畜産総合センター	飼料作物によるワルナスビの耕種的防除法に関する研究	H19～22	牧草地のワルナスビの繁茂が飼料作物の収量、嗜好性に影響するが、薬剤による有効な防除法がないため、薬剤に頼らない環境にやさしい防除法の確立を図る。	B	<ul style="list-style-type: none"> <li>物理的試験はもちろん重要かつ必要であるが除草剤の効果的活用法も補助的に調査研究すべきでは。</li> <li>庇圧だけで防除するには8、9月が手薄である。多種の混交を考慮すべきであろう。</li> <li>発生、生育については、単に発生時期ではなく温度・湿度の解析を行うべきだと思います。</li> <li>今後、耕種的防除にこだわらず、広く検討した方がいいのではないか。</li> <li>外来種であっても100年もの間に拡がり続けたら植物の防除は難しいと思います。耕種的防除の研究成果はあったので良かったと思います。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>目的は耕種的防除法の開発でしたが、それだけでは根絶できないことがわかったため、薬剤防除試験(3薬剤)も平成21年8月から実施しており、ラウンドアップルイロード、ハルルドで茎葉が完全に枯死した。</li> <li>北方系牧草はどうしても、夏枯れにより勢力が劣り、ワルナスビの生育阻害能力が劣ってくる。夏型牧草の導入により、その弱点をカバーすべくスグラス+イタリアンライグラスの輪作試験を実施し、一定の成果が出ている。</li> <li>気象条件等の悪化により、茎葉の養分を根茎に移動貯蔵する等の耐性能力に優れているという報告がある。今回も可能な限り調査を行いたい。</li> <li>今後は耕種的防除における牧草の組み合わせプラス薬剤防除試験も実施していく。</li> </ul>